

牧師室から (2021.11.7)

私共夫婦は、昼食には麺類が多い。所謂「めんくい」である。スパゲティーも冷蔵庫の品を見て適当に作り替えている。初めの頃はホワイトソース、カルボナーラ、ペペロンチーノ或いはトマトソースを作り置くなどして色々なものを作っていたが、この頃は面倒になって、ナポリタンを作ることが多くなった。最初はレシピ通りにピューレも使っていたが、この頃はケチャップだけである。ピーマン、人参、マッシュルーム、玉ねぎなどあるものを使って、肉は残りのベーコンかソーセージを使う。ソーセージを蛸にしたりして遊んだりもする。通常の麺はアルデンテにするが、ご年配の方からは、「これ半生でないの?」と言われそうである。しかしナポリタンの場合にはアルデンテにはしない。何よりも茹で過ぎてブヨブヨしてケチャップでベチョベチョしたのが懐かしくて良いのだ。学生の頃、学校帰りに喫茶店でそれを食べながらインベーダーゲームをしていたのを思い出す。

ナポリタンはその名とは裏腹に、日本発のメニューである。大分前にテレビでナポリの市長に日本のナポリタンを食べてもらうという番組があった。いきさつを聞いた市長は、これを食べながら「確かにナポリにはないけど、なかなかいけるね、美味しいよ。」と言っていたところに、このイタリア人の懐の深さを感じた。小生はイタリアに行ったことはないが、その国の作曲家フレスコバルディは好きなので、尚更行ってみたくなった。これに限らず例えばフランス料理などでも、本場第一主義というのはあまり感心しない。返って外国でアレンジされた物の方がおいしい場合もあるのではないか。

キリスト教も元を正せばパレスチナ地方のものであるが、それがヨーロッパで広まり発展していったものなので、一般のイメージではキリスト教は欧米の宗教という感覚がある。しかし現在では部分的にアジアやアフリカで強勢が伸びている。

勿論「源泉に帰る」という姿勢は大事であると思うが、さりとて発展したものに対してそれを変質したものとし、頭から否定的に見る必要はないと思う。様々な試みを通して現在の状態にあるものをその経緯を顧みるのは面白いことである。もし今の状態について何か問題にすべきことがあるならば、それは原点にまで立ち帰ることが必要となるかもしれない。教会形成や礼拝様式についても、確かに昔を見直すのもよいが、現在の時代、周囲の変化などを鑑みると、本質を変えることがなければ、原点回帰に過度に固執する必要はないのではないかと思ったりもした。

(鈴木淳一牧師)